

マルサス『人口論』初版における人口動学メカニズム

神戸大学大学院経済学研究科 久松太郎

19世紀初頭のイギリス経済学を支配し続けたリカードウがしばしば頼ってきた理論のなかに、マルサス人口法則がある。リカードウ以後の多くの古典派経済学者たちもしばしばこれを利用した。とりわけ、多くの経済学者たちが従ってきた考えは、人口が増加するか減少するかは、実質賃金率が最低生存水準を上回るか下回るかによるというものであった。さらに、多くの経済学者は、説明の単純化のために、しばしば実質賃金率を食料（もしくは穀物）の数量で評価してきた。Pasinetti (1960) や Eltis (1980), Casarosa (1982), Pingle (2003) などの現代の研究者が古典派経済学を数理モデルで分析する際にはこの方法（食料などで評価された実質賃金率と最低生存水準の乖離を人口の時間微分の関数とみなす微分方程式）をよく用いてきた。

確かに、この人口原理の創始者であるマルサスも『人口論』初版で上述のような人口動学メカニズムを展開していた。しかしながら、マルサスは、(1) 労働者への賃金支払いは貨幣でなされるのであって実物でなされるのではないこと、(2) 名目（貨幣）賃金率の変化は常に食料価格の変化に先行すること、(3) 労働者は名目（貨幣）賃金率の変化に反応し、したがって人口は貨幣賃金率の騰落に応じて増減することを考慮に入れていたことからして、より複雑なメカニズムを提示していたと考えられる。

そこで、本報告では、実質賃金率が貨幣賃金率を食料価格で除したものに等しいものとたうえて、食料価格についての動学関係を追加することで、より詳細なマルサスの人口動学に関する説明を行う。この分析によって、『人口論』初版でマルサスがたびたび主張してきた、農業投資への重要性を整合的に説明できると考えられる。分析の概要は以下の通りである。

投資が工業においてのみなされる場合についてのマルサスの叙述から、次のような動学メカニズムを読み取ることができる（ただし、産業間の人口移動はないものとする）。当初、実質賃金率が生存水準に等しい状態から出発するとして、工業においてある与えられた食料価格のもとで名目賃金率が上昇すると、人口はその変化に反応して増加する。食料を供給する農業人口は初期時点から変わらない一方で、工業人口が増加するので、総人口は増加する。食料供給不変のまま、食料を需要する総人口が増加することで、食料需要は食料供給を上回る（食料不足の状態になる）。それによって、食料価格は上昇し、（上昇していた）実質賃金率は下落する。しかしながら、不変の食料供給は増加した総人口の維持には足りないために、食料価格は名目賃金の上昇率を上回って上昇する。そのため、実質賃金率は生存水準を下回ることになり、それによって人口は減少する。このような動きは、体系の運動が止まる状況に至るまで繰り返される。人口の振動、すなわち人口がどれほどの死滅と出生を繰り返すかは、実質賃金率と生存水準との乖離に対する人口の反応の程

度、需要と供給の乖離に対する食料価格の反応の程度、外生的なショックとして与えられる名目賃金引き上げの強度に依存する。

今度は、農業においてのみ投資がなされ、名目賃金率が引き上げられる場合を仮想的に考えてみる（マルサス自身はこのような場合を想定した説明を行っていない）。先と同様に、実質賃金率が生存水準に等しい状態から出発するとする。ある食料価格のもとで名目賃金率が外生的に引き上げられることで、実質賃金率は最低水準を上回り、人口は増加する。それによって、食料需要は一時的にその供給を上回り、食料価格は上昇する。しかしながら、この場合は、工業のみへの投資がなされる場合とは違って、食料供給の増加が続くので、以前よりも多くの人口の扶養が可能となる。それゆえ、経済は人口の増加とともに成長することになる。

このように、農業への投資による名目賃金率の引上げにみられるような需要の創出は有効であって、工業への投資による名目賃金率の引上げにみられるような需要の創出は無効であるといえる。

本研究の特徴は、名目賃金率の変化と食料価格の変化とのタイム・ラグを考慮に入れ、よりマルサス自身の言説に近い理論的説明を与えたことにある。また、本研究での考察では、マルサス自身が与えた前提のもとでは、農業への投資による発展は、社会的厚生観点からして、工業への投資による発展よりもはるか望ましいものであることが示される。マルサスの考えは、工業ではなく農業への有効需要の創出政策が社会的厚生の改善をもたせた経済成長を導くことを含意していた。

主要参考文献

- Casarsa, C. (1982). The New View of the Ricardian Theory of Distribution and Economic Growth. In *Advances in Economic Theory*, edited by M. Baranzini, Oxford : Blackwell.
- Costabile, L. and B. Rowthorn. (1985). Malthus's Theory of Wages and Growth, *The Economic Journal*, 95 (378): pp. 418-37.
- Eltis, W. A. (1980). Malthus's theory of effective demand and growth, *Oxford Economic Papers*, 32: pp. 19-56.
- Malthus, T. R. (1986). *An Essay on the Principle of Population, as it Affects the Future Improvement of Society, with Remarks on the Speculations of Mr. Godwin, M. Condorcet, and Other Writers*. In *The Works of Thomas Robert Malthus*, Vol. I., edited by E. A. Wrigley and D. Souden, London: William Pickering.
- Pasinetti, L. L. (1960). A Mathematical Formulation of the Ricardian System. *The Review of Economic Studies*, 27 (2): pp. 78-79.
- Pingle, M. (2003). Introducing Dynamic Analysis Using Malthus's Principle of Population. *Journal of Economic Education*, (Winter): pp. 3-20.

堂目卓生 (1992). 『古典経済学の模型分析』 有斐閣.

渡会勝義 (1988). 「マルサスの「一般的供給過剰」の理論」『経済研究』(明治学院大学) (81)
pp. 39-115.

渡会勝義 (1997). 『マルサスの経済思想における貧困問題』 一橋大学社会科学古典資料センター.